

---

# グッドフレンド

カツオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

グッドフレンド

### 【ZPDF】

Z0980A

### 【作者名】

カツオ

### 【あらすじ】

あんなにいろんな体験をしたあの時代は絶対忘れないと思う。こんな思い出を作ってくれたあいつに感謝をしたい。そんなオレの中学生3年生の体験話を聞いて下さい。

## プロローグ（前書き）

こんにちは。カツオです。これは、12歳の時に書いた話です。  
カツオもいつかこんな体験したいと思つてます。

## プロローグ

オレの宝物は宝石でも卒業アルバムでもない。

中学3年生だ。あんなに多くの体験をしたのは初めてだつたような気がする。

「大島さん。感動した話つてありますか？」

運悪く残業になつてしまつた後輩が、同じく運悪く残業になつてしまつたオレに言つた。

「なんで？」

オレもそんな理由もなしに話すぐらいのお人好しではないので、理由を聞いてみる。

「なんかDeep Love以来で感動したことないんです。あるなら話して下さい」

なんとなく納得したので、話してみた。

「今から話す事は、みんな本当の話ですからね…………」

オレがしばらく話した。それは、中学3年生の話だった。

オレが話していくうちに、後輩がポケットからハンカチを出して、ぽろぽろと涙を流しながら口を手で押させていた。

「よし、話はここまでだ。仕事に励んでくれ」

「私、トイレにいってきます！」

後輩がトイレに走つて、入つた直後に泣いている音いや、声がした。

オレが体験した出来事は、こんなに人々を感動できるのかとオレは思う。

確かにあのときはオレも泣いたが、関係ない人でも、あんなに涙を流せるとは思つてなかつた。

それでも、長くないか。

それでも、あいつは今、何してゐるのか、今でも何回かそう思つ。

オレはあいつに感謝している。

あんなオレでもこんな人生に歩んでくれた。

もし、目の前に現れたら、何回頭を下げるだろうか。

オレは書類を保存して、インターネットをつなげた。

そして、感動する話募集中とか言つサイトにさつきの話を打ち

込んだら、すぐ感動した。とかいう感想が何通も来た。

まあ、こんなものかと思って、机の引き出しを開けて、紙を出した。

「good friend!」

と書いてある。

オレはそれを見ると、涙が流れて流れてたまらない。

オレは、あいつに会えて本当によかつた。

さて、オレの話はすぐ長くなるかもしね。けど、ようしきお願いします。

オレは中学2年生の時、ある4人組と仲良くなつた。

その4人は、桐島、新井、栗田、榎本だ。

この4人は最悪の不良で、生徒指導の先生もやれやれと言つている。中学3年生になつてからは、あいつらと仲良くなつてオレはどうしたかたのだろうと思つていた。

しかも、オレも不良扱いにされていた。

前、好きな子に告白したら、

「怖いからやだ」

と言われた。

あのときはオレも泣きそうでも、机をダンダン叩いてさ。もうあいつらのせいでオレの青春が終わつたなんてと思つと、すげいやだつた。

こんなことがあってから、オレはあいつらと距離を空けたが、また縮めてくる。

オレは今の自分に後悔している。なぜ、あんな奴らと友達になつたんだろう。

あいつらは毎日遅刻してくる。

平均的に3时限目ぐらいだ。それまでは、オレは普通の人として見てくれる。だが、あいつらが来ると、オレは不良となる。

その境界線はオレはものすごく嫌だった。

「あの不良五人組、いつもつるさいよね」

「高校受かんないよ絶対」

とひそひそ話をしている。それも嫌だった。

当の不良たちは、

「言わせるだけ言わせりやええがな」

とか言つている。

あいつら、幸せだな。絶対。

ある日、オレは先生に呼ばれた。

聞いてみると、

「おまえの内申点は不良たちとは多いが、第一希望の高校は無理だと思え。わかつたな」

つて言われた。あいつらといふせいで、オレは高校も落ちそつだ。

「くそつ！」

オレは廊下の壁を蹴った。小さく響いた。

後輩がオレにびびって逃げてゆく。

ふつ、オレが不良に見えたのだろう。好きに不良にしてくれや。

オレはそう思つて、膝をついた。

人はこの人の周りの状況だけで、人の性格を判断する。外れても、当たつてると確信する。

そして、人を落としてゆく。

一人で歩いて帰つてみた。

うざつたがい4人組がいないと、なんて気が楽なんだろうか。

翌日、いつもの通り、玄関で立ち止まる。

だが、一回頷くと、玄関のドアを開ける。

これはごくせんのヤンクミがファイトーオーとやつてゐるとまあ同じものだ。もう日課なのだ。

今日はクラスのみんなが違うテンションだ。

不良はない。

ただいま、オレは普通の中学生だ。

「どうしたん？」

普通のオレが近くの人に話しかける。

「転校生が来るんだよ。面食いの太田が一日惚れするほどかっこいいんだつて」

クラスメイトは普通のオレとして話してくれた。

不良のオレだと、

「金は持つてないよ」

とか言つ。

ところで、面食いの太田は、

「これは、私の運命よ。私の運命」

とか言つてゐる。

オレも前、ナンパされてゐる太田を助けたところ、2日後、告白された。

オレは自画自賛はしたくはないが、多分ジャニーズ顔だらう。

キーン、コーン、カーン、コーンとチャイムが鳴つた。

先生が教室のドアを開けると、それを合図に全員が席についた。

「今日も不良は遅刻か。まあいいよな」

出席簿を教卓の上に置いて重い荷物を降ろした感じの笑顔になつた。

オレは思つたがあいつらは出席確認以外は全ての先生に不良と呼ばれてゐる。

「別に名前で呼ばれたくないねえ」

とかあいつらは言つてゐるが、裏では氣にしてるかも知れない。

「ところで、今日は転校生が来た」

待つてましたかのようすにクラスが騒ぎ始める。

「福原、入れ」

太田がとてつもない笑顔になつてゆく。

教室のドアが開く。

教室に入つてきたのは田と鼻が成り立つてて、背が高く痩せてゐるイケメンだつた。

「福原徹です。よろしくお願ひします」

福原はふかぶかとお辞儀をした。太田はおつとりしてゐる。

チャイムが鳴つた。太田が福原に質問できなくて残念がつてゐる。

「それじゃ、朝のホームルームは終わりだ。福原に質問したければ休み時間にしろ。あつそつだ。福原は奥山の隣だ」

そう言つて先生は教室から出て行つた。あつ、俺の名前は奥山まことです。

福原はオレの隣にいそいそと座った。イケメンなのにすげく緊張するそうだ。オレはなんかかわいそだだから話しかけた。

「大丈夫、オレのクラスメートは全員いいやつだから。オレの名前は奥山まこと。よろしくな」

「そ、うなん、よろしく。僕は福原。てかさつき言つたよね」

「そ、うだつたな。よろしくな」

「なんだいなんだい。緊張してると思つたら以外と面白い事話すじゃんか。」

オレが思つていると、いつのまにか女子の人だかりが出てきて、内心ビビった。

まあいいや。女子と福原の会話でも聞いてやろうじゃないか。

「福原君の家つてどこ?」

「さくら商店街とメチャ面ロロッケの池田の間だよ

おつ、オレの向かいじやん。

どうりで引っ越し屋とロロッケの池田がワーワー言つてたな。

「福原君の兄弟つて何人?」

「企業秘密にしてもいい?」

「企業秘密かよつ!しかも女子しらけてるよ。

「ひついう芸風なんだ。面白いね

「どこがだよ。

「企業秘密にしてもいい?」

意味わかんねえよ!しかも太田がおつとりしてるし。

「かつこいー...」

太田が呟いてます。

すげーな福原は、つて思いながら聞いてると、中学校ではありえないバイク音。

あいつらだ。光輝くハーレー部隊に学校に送つてもらつた不良のあいつらだ。

「うーす、どうも」

ハーレー部隊のリーダーらしい人が清掃のおばちゃんに言つて

る間には、あいつらは校舎に潜入した。

オレはその情景をまじまじと見つめながら、後ろでは不良になつてゐるオレに対する視線が気になつた。

しかもそんな情景は生徒指導が許すはずもない。急いで階段を駆け降りる音が聞こえた。

生徒指導はまず、あいつらを外に出した。

窓を閉めてるから聞こえないのとオレは窓を開けた。

「何やつてるんだ！！？」

「遅刻したから送つてもらつたんだ！！悪いかよ！！」

「送つてもらう場合は学校に連絡！！あとハーレーなんかに送つてもらひうな！！」

「じゃあ、スピーカー内蔵の車に来てほしいんですか」

「ふつうの車だ！！」

「ふざけるな」

ハーレー部隊のリーダーが生徒指導に膝ぎりをした。

生徒指導の先生が後頭部を押されてのたうち回つてゐるのを、ハーレー部隊とあいつらが笑つていた。

オレはとてつもなくやばいことに気づいてカーテンを閉めようとしたが、目が合つてしまつた。

「奥山……」

あいつらもハーレー部隊もクラスのみんなもオレをみた。もちろん、福原もだ。

福原はキヨトンとしている。

「奥山！！あそこのパチンコ屋に新しいパチスロが入つたからやううぜ！！こんな場所、サボるうぜ」

あいつらの辞書には受験と言つた語がないのでしょうか？

「行こうぜ！！ハーレーに乗せてやるから」

すると、ハーレー部隊のリーダーがオレを窓から引きずり出して、ハーレーに乗せた。

桐島がヘルメットを被つて、

「レツツア gōo!!

と叫ぶと、ものすごいスピードで校門から出ていった。  
本当にこれでいいのか。

福原については、最悪の転入生デビューとなつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0980a/>

---

グッドフレンド

2010年10月12日06時25分発行